

## 『ペテロ：キリストにあって失敗が益となる』

私達は礼拝メッセージ・シリーズとしてこの半年の間、「人生の危機管理・失敗から学ぶ」ということを見てまいりました。それが早いもので五月となり、来月18日には教会総会があり、その日から新しい教会標語と共に新しいメッセージのシリーズを始めたく、備えております。そこで、来週はピクニックとなり、再来週、六月の第一日曜日はペンテコステのメッセージを用意しています。そして、6月11日にヨハネをもってこのシリーズを終わりたいと思います。

何かを選ぶとき、私達は大抵、少しでも最善のものを選びます。それは歯磨き粉を選ぶ時も結婚相手を選ぶ時もそうです。知っていながら事故車を買って求めたり、傷んでいるバナナを買って求める人はいません。会社で誰かを雇おうとする時もそうでしょう。入社希望者と面接をして、その中からその会社にとって一番、適した人材を私達は選びます。

2000年前に、イエス・キリストが考えていた計画は後にも先にも比類なきものでした。それは、この世界を変えようという壮大なプロジェクトでした。しかも3年、10年、100年、300年、続けばいいというプロジェクトではなく、それまでの世界を全く変えようとするプロジェクトでした。

私達の常識はそのようなプロジェクトを共にしようとする同志を選ぶ場合、当然、そのことに関する専門知識や十分な経験やその人のバランスのとれた性格を考慮します。しかし、イエス様は驚くべきことに、そのようなことは全く範疇にないかのごとく、これらのものを全く有していない男達、いいえもっと言いますと、そのセレクションから一番、かけ離れていると思われる者達を12人、選ばれたのです。そして、さらに驚くべきことは、そんな者達から始まったクリスチャーニティーが現在もこの世界において人の魂の変革をなし続け、その計画は完全なかたちで成就し、今もとどまることのないことです。そう、そのプロジェクトは成就したのです。

その12弟子の中で一番弟子と言われている人にペテロという人がいます。その人となり私達は聖書の中からうかがい知ることができます。聖書の中には12弟子の名簿が四度、出てきますが、そこに記されている弟

子の名前の順番はそれぞれ違っているのですが、ペテロの名前だけは常にその筆頭にあります。外部の人はまずペテロに問いかけ（マタイ17章24節）、ペンテコステにいたるまで彼は常に弟子の間で議長格であり（使徒1章15節-26節）、ペンテコステの日にもまず立ち上がって説教したのもペテロでした（使徒2章14節）。これは彼が弟子の中の年長者であったということもありますが、それ以上にやはり彼の内には何かがあったのでしょうか。しかし、その彼の資質も当初はでこぼこの原石であり、粗削りでした。

ペテロは新約聖書において160回以上名前が出てくる人物であり、細かいところを見るとキリがありませんが、色々な彼の姿を聖書の中に見ることができます。彼は情熱の人であり、また真実な人でありました。主の召しがありました時にはためらうことなく一切を置いて主に従いました（マタイ4章18節-20節、19章27節）。主の神性をすばやく認め、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と告白したのは彼でした（マタイ16章16節）。何かといえば真っ先に口を出したのも彼であり、そのことで失敗を繰り返しました。

水の上を歩くイエス様の姿を見て、真っ先に彼も水の上を歩き出しますが、風を見て溺れかけるペテロ。十字架にかけらえる数時間前にイエス様が弟子達の足を一人一人洗われた時、「私の足は決して洗わないでください」と言いながらも「それなら私と関わりはない」とイエス様にたしなめられて、「それなら、足も手も頭も」と願ったとんちんかんなペテロ。

その他にも彼に関する記述はたくさんありますが、今日は特に一日も経たないうちに起きましたペテロの一連の出来事を見ていきたいと願っております。その時、イエス様はペテロ、ヨハネ、ヤコブだけを連れて、ゲッセマネの園において祈っていました。

その時、イエス様を捕えようという者達の足音がすぐ近くにまでやってきていました。その時のイエス様は十字架に磔にされる直前でした。その十字架にかかるということをイエス様は父なる神から自分に差し伸べられている杯を飲み干すという言葉で表現されました。イエス様はその時、「悲しみのあまり死にそうだ」と弟子たちに打ち明けました。祈りながら、その汗が血のしたたりのように地面に落ちました。

そのような時に共に祈ってもらえるように三人の弟子を伴ってきていたのです。しかし、彼らにイエス様の苦しみに対する理解はなく、眠りこけていました。彼らは二回もイエス様によって起こされ、三回目にも彼らは眠っていました。その中にペテロがいました。我々は誰かが悲しみのあまり死にそうだともだえている傍らで眠りこけることができるのです。

その時に12弟子の一人であるユダを先頭に祭司長、民の長老など大勢の人が剣と棒をもってやってきました。ユダの接吻を合図にイエスを捕えるという手はずが整っていました。まさにイエス様を裏切ろうとするそのユダに対してイエス様は「友よ、なんのために来たのか」と言われました。そうです、イエス様は彼を「友よ」と呼ばれました。眠りこけていたペテロもさすがにこの時はただならぬ状況に目を覚ましたのでしょう、イエス様に危険がのぞんでいるということを察知し、とっさに剣を抜き、その場にいた大祭司の僕の耳を切り落としました（これがイエス・キリストの最後の癒しの奇跡となりました）。彼の心の中から込み上げてきた感情を彼は収めることができなかつたのです。

イエス様はその耳を拾い上げ、もとのとおりにその僕につけてあげ、こういわれました『剣をさやに納めなさい。父がわたしにくださった杯は飲むべきではないか』（ヨハネ18章11節）。そして、すぐにイエス様は捕えられていきます。もし、イエス様がその僕の耳をもとのとおりに癒すことがなければ確実にペテロも捕えられたことでしょう。以降、その場に居合わせた者達は逃げ、ペテロだけがかろうじて遠くから、イエス様の後について来て、大祭司の中庭にもぐりこみました。その時にあの有名な出来事がおこりました。

イエス様の回りには不正な偽証を得ようと、祭司長、律法学者、多くの偽証者に囲まれていました。イエス様の回りにはイエス様を弁護してくれる人が一人もいませんでした。

イエス様が尋問を受けている間、ペテロは中庭で焚き火にあたっていました。そんな彼に一人の女中が来て言います（マタイ26章6節－71節）「あなたもあのガリラヤ人イエスと一緒にだった」。ペテロはみんなの前でそれを打ち消して「あなたが何を言っているのか、分からない」と打ち消し、入り口の方に出ていきました。その中庭から出ていこうとしたのかもしれません。

しかし、別の女中が彼を見て、そこにいる人々に向かって（マタイ26章71節-72節）『この人はナザレ人イエスと一緒にいた』と言われると、再びそれを打ち消して「そんな人は知らない」とペテロは誓いました。

すると今度はそこに立っていた人々が近寄ってきて言います（マタイ26章73節-74節）「確かにあなたも彼らの仲間だ。言葉づかいであなたのことが分かる」。ペテロは「その人のことは何も知らない」と激しく誓いました。するとすぐに鶏が鳴きました。

実はこのようなことがペテロの身に起こる数時間前に彼は「主よ、私は獄にでも、また死にいたるまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」（ルカ22：33）と書いていました。ついさっき言った言葉ですから忘れようにも忘れられないでしょう。しかし、その時にイエス様はこうペテロに言われていたのです「よくよくあなたに言うておく。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」（マタイ26章34節）。このことを思い起こし、ペテロは大祭司の中庭から外に出て激しく泣いたと聖書は記しています。

三度、イエス様を否んだということは、たとえ一度否定しても、あとの二度はそれを打ち消していくチャンスがあったということです。しかし、ペテロは「何を言っているのか分からない」とイエスを打ち消した後「そんな人は知らない」と誓い、「その人のことは何も知らない」と激しく誓うことによって全てのチャンスを失ってしまいました。

この時点でペテロは裏切り者、臆病者、笑われ者として彼の名前は聖書から消えていったことでしょう。しかし、イエス様はそんな彼に復活してあらわれ、親しく語りかけました。あのガリラヤ湖でイエス様はもう一度、ペテロをはじめ弟子たちにその姿を現され、ペテロに三度、親しく問うたのです「私を愛するか」と。

皆さん、イエス様はこれらのことが起こる前にペテロにこう語りかけていました。「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくなないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直った時には、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ22章31節-32節）。

イエス様は気づいておられたのです。これからペテロがしでかしてしまうことを。まさしく、それはサタンによってふるいにかけてられるようなことだということを。ペテロは激しく揺さぶれるだろうということを。不思議なことにサタンはそれを願い、そして、それは許されたとある。なぜ、許されたのか、イエス様はペテロがそのふるいにかけてられ、揺さぶられ、試みられても、彼は立ち直ることができると信じておられたのではないのでしょうか。否、それだけではない、彼は一度、そのようなところをとおって、自分の自信と力というものが根底から崩される必要がある。それなくしては、彼は用いられることはないということをイエス様は知っていたのでしよう。

ゆえにその試みによってペテロの信仰がなくならないようにという、イエス様の取り成しの祈りがそこにはあったのです。弟子たちが朝、起きるといつも、その寝床におられなかったイエス様、いつも一人、寂しいところに行かれて祈っておられたイエス様。イエス様は何を祈っていたのか。彼は自分の弟子のため、そして、この荒削りのペテロのために祈っておられたのです。彼の信仰がなくならず、そして立ち直った時には兄弟達を力づけることができる男になれるようにと。

「あなたが立ち直った時には、兄弟を力づけてやりなさい」。このイエス様の言葉と共に一人の神学校の恩師の言葉が心に残っています。その恩師は17回、学校を退学しました。普通、退学したくとも17回はできません。言うまでもなく、師は相当の問題児だったのです。その人が牧師をしているのですから、神様のなさるわざは計り知れません。その先生が口ぐせのようにいつも言っていたことは「つまづいた者でなくては、つまづいている者を助けることはできない」ということです。イエス様はこの法則をペテロに当てはめたのです。

ペテロが大祭司の中庭で3度イエスを知らないと言ったこと。その出来事をペテロは秘密にしておくことができたのではないだろうかと思います。自分の恥をあえて記録に残しておくのもどうかと思いますから。ですから福音書を書いた仲間たちにこっそりと耳打ちすることもできたかもしれません。「お願いだから、あの時の事だけは書かないでおいてくれ」。しかし、このペテロの失敗は全ての福音書にねんごろに記されており、今や世界中の人がペテロの失態を知っているのです（マタイ26章69-、マル

コ14章66節-、ルカ22章54節-、ヨハネ18章15節-）。

それにしても四つの福音書の全てにこのことが記録されているということはどういうことなのでしょう。おそらくペテロはこのことを公にすることをよしとしたのではないかと思われます。なぜ？彼の失敗に対するイエスの愛と恵みを彼は知り、そのことは後世に伝え残すべきことだと思ったのでしょうか。おそらく、このことを隠すどころか、彼は口癖のようにこのエピソードを話して聞かせたのではないのでしょうか。彼がそのことを語れば語るほど、イエス様の愛の大きさが伝えられるからです。そして、失敗を語ることができるのは、彼がその失敗・をイエス・キリストにあって克服できたからなのです。

使徒行伝4章にはこれらの一連の出来事があり、復活のイエスに出会い、天来の聖霊を受けた後のペテロの姿が記されています。「この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」（使徒行伝4章12節）。それを聞いていた人たちはペテロの大胆な言葉にびっくりしてしまいました。なぜなら、二人が無学なただの人であるということを知っていたからです。人々がこのような話をやめさせようとして、彼をおどしたにもかかわらず、彼は言いました「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。私たちとしては、自分の見たこと、聞いたことを語らずにはいられない」（使徒行伝4章19節-20節）。ここにあの大祭司の中庭でびくびくしていたペテロとは別人となったペテロの姿があります。

皆さん、イエス様がペテロに初めてお会いになった時、舟と網を捨てて従って行った時、ペテロを見られたイエス様は何と言いましたか。「あなたはヨハネの子、シモンである。あなたをケパと呼ぶことにする」（ヨハネ1章42節）。「ケパ」とは「岩」という意味です。風を見て恐れ、捕えに来た者になりふりかまわず剣を振りかざし、大祭司の中庭で女中が発した言葉におおいに動揺した彼がイエスの言葉とおりに、動じることがない堅固な「岩」と変えられたのです。イエス様はペテロの失敗が立て続けに起きる前に彼を岩と呼んでいたのです。そう、彼の弱さを知りつつも、その弱さが変えられ、否、その弱さゆえに彼は倒れている人を立ち上がらせるような岩となるとイエス様は信じていたのでしょうか。

私達も失敗をします。失敗はそれを嘆き続けるのなら、そのままの失敗であり続けます。しかし、その失敗により、同じ境遇を歩んでいる者を励ますことができるのなら、その失敗が転じて、宝となります。失敗の数だけ多くの人たちを励ますことができます、理解することができます。これらのことは私達の失敗にイエス・キリストがかかわった時に起こることなのです。

なぜ今日のキリスト教があるのでしょうか。そのキーパーソンとなりました人にパウロという人の存在があります。彼はかつてキリスト教徒を迫害していた人です。その命を奪うことに情熱をかけていた人です。その彼が回心して、キリストを伝えることに命をかけました。かつて対極にいた人間を神は引き上げ、その対極にいる者達の気持ちが分かる男であったからこそ、彼はイエスの教えをイスラエルの一地域のから世界へと広めることができたのです。彼の迫害者としての人生は無駄ではなく、それがあったからこそ今日のキリスト教はあるのです。

今、上映されている「The Case for Christ」という映画は、この世界に神などは存在しないということを固く信じていた無神論者であったリー・ストロベルというジャーナリストの生涯を描いた実話です。彼のこの世に神などは存在しないという思いは強く、そのことゆえに彼はクリスチャンである妻との間がうまくいかず、結婚の危機を迎えていました。その彼が自分の職業であるジャーナリストが事実だけを追い求めて記事を書くように、納得のいくまでイエス・キリストの十字架と復活について全米中の学者たちに取材をし、そこから得たことを全て目の前に並べた時に、彼は神を受け入れ、神を信じたのです。そして神なき者として生きてきた彼のその人生は無駄ではなく、それがあったからこそ彼には他の者達が持ちえない確信に満ちた証言があり、今もその証言をたずさえて世界中を旅しているのです。

ペテロとヨハネのもとに足のきかない男がやってきて施しを請うた時にペテロとヨハネは彼をじっと見つめていいました「わたしたちを見なさい」(使徒行伝3章4節)。そう、その言葉は自分の全てをあなたは見たらいいと言っているかのようです。「わたしはあなたの前に何も隠すことはない。弱い自分であり、多くの失敗を繰り返してきた男だ。よくごらん」。そして、ペテロは言います。「金銀はわたしには無い。しかし、私にあるものをあなたにあげよう」。ペテロにあるものは何ですか。数えきれない

ほどの失敗と、その失敗を包み込んでくれた主イエスの愛です。彼は失敗に目を留めるのではなく、その失敗から引き揚げてくださいました主イエスのほうに目を留めましたから、自らの失敗を隠す必要はありませんでした。否、自分の失敗を語ることにより、イエス様の愛が明らかにされるのなら、彼はその失敗を用いてキリストの愛を伝えたのです。そう、金銀は彼にはありませんでしたが、失敗の数だけキリストの愛がありました。それをあなたにも与えようとペテロは言ったのです。

主にある皆さん、ペテロの失敗は救い難き失敗と思えました。しかし、イエス様はその失敗から彼を立ち上がらせ、彼は岩なるペテロに代えられたのです。そして、キリストが言ったように人々を励まし、キリストのもとにお連れするメッセンジャーとなったのです。この同じことが私達の人生に起きます。私達がこの人生において一番、負い目に感じているようなこと、償いきれない失敗、それを主は用いて、私達を用いられるのです。誰がこんな人生を考えていたでしょうか。そんな驚くべき生涯に今日もイエス・キリストは私達を招いているのです。お祈りしましょう